

【論文 7】

『仏説十二遊経』の仏伝伝承

——成道後 12 年間の雨安居地を中心にして——

岩井 昌悟

【0】はじめに

[1] 原始仏教聖典資料に基づいて釈尊の成道後 45 年間の事績を明らかにするという目的を達成するための第一の手がかりは、釈尊の雨安居地伝承である。釈尊が何年めの雨安居をどの地で過ごされたかが分かれば、それを基準にして原始仏教聖典中に散在する釈尊の生涯にまつわる記事を時系列に従って並べるよすがとすることができると考えられるからである。

釈尊の 45 回の雨安居地伝承については、筆者はすでに本『モノグラフ』第 6 号に掲載した【論文 5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」においてそのヴァリエーションを整理して、簡単にではあるが原始仏教聖典中の記事とそれとの整合性を調査し、雨安居地伝承がどのように原始仏教聖典中の記事とかかわっているのかを吟味した。

その際に最終的な結論を得るための課題として残された事柄が 2 つあった。その 1 つが、原始仏教聖典中の釈尊の雨安居の記事についてパ・漢の対応関係などの調査を含めてより高い精度で検証を行うことであり、これは未だ作業途中の段階にある。もう 1 つが雨安居地伝承がどのように成立してきたかその生成過程を探ることであり、本論はその作業の一環として『仏説十二遊経』（以後『十二遊経』と表記する）を取り上げ、それがどのような資料に基づいて成立しているかを調査したものである。

[2] 本論でとりわけ『十二遊経』を他の雨安居地伝承と別個に扱った理由は以下の点にある。

1 つは『十二遊経』の伝承の性格が他の伝承と異なっているために同列に扱うことが困難なことである。すなわち他の雨安居地伝承が釈尊の成道後 45 回全ての雨安居についての資料であるのに対して、『十二遊経』はその題名が示すとおり釈尊成道後 12 年間についてのみ記している。また『十二遊経』に示される年次と地名は他の伝承のそれと大きく相違している⁽¹⁾。

もう 1 つの点は『十二遊経』には他の伝承にはない釈尊成道後 12 年間の遊行についての説法地と対告衆が記されているほか、釈迦族の起源、降兜卒、釈尊の親族などについての記事が他の仏伝経典類との比較を可能にし、ひいてはこの経の属する系統を知る手がかりになることである。

(1) 『モノグラフ』第 6 号【論文 5】【1】 - [2-6] [5-1] [5-2]

[3] 数種の雨安居地伝承の中、『十二遊経』の伝承がいかなる場所に位置づけされるかここで見ておきたい。雨安居地伝承には年次の情報を含むものと回数のみを示すものの 2

種類があるが、その違いを無視して文献の成立年代の古い順に列挙すれば以下のようなになる。文献の成立年代がそのままそこに含まれる伝承の新古を示すものではないが、ある程度の目安にはなると思われる。年次の伝承を含むものと回数のみを記すものの区別を《 》内に記しておいた。

- ①『僧伽羅刹所集経』（大正 04 p.144 中）建元 20 (A.D.384) 年に長安にもたらされた。原典の成立は西暦 1～2 世紀か (1)。《年次の伝承》
- ②『仏説十二遊経』（大正 04 p.146 下）迦留陀伽訳は A.D.392 年。現存しないが彊梁婁至訳は A.D.266 年。《年次の伝承》
- ③ *Anguttaranikāya-aṭṭhakathā (Manorathapūraṇī vol.II p.124)* Buddhaghosa 作。5 世紀前半 (2)。《年次の伝承》
- ④ *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā (Madhuratthavilāsini p.003)* Buddhadatta 作。Buddhadatta は上記 Buddhaghosa と同時代人であったとされる (3)。雨安居地伝承については③とまったく同じ。《年次の伝承》
- ⑤ *Dhammapada-aṭṭhakathā (vol. I p.004)* 編者不明。《回数の伝承、舎衛城とカピラヴァットウのみ》
- ⑥『仏説八大靈塔名号経』（大正 32 p.773 中）宋の法賢（または天息災 ?～1000）訳。《回数の伝承》
- ⑦ *Bu ston, Chos 'byung* プトンが A.D.1322 に著した (4)。《回数の伝承》
- ⑧ *P. Bigandet, The Life or Legend of Gaudama, The Buddha of Burmese, 2vols.* 初版 1858, 第 2 版 1866 《年次の伝承》
- ⑨ *R. Spence Hardy, A Manual of Buddhism, In its Modern Development, Translated from Singhalese MSS.* 初版 1853 《年次の伝承》

⑧⑨は近代の西洋の研究者の著作であり、細部が異なるものの③④をもとにしたと考えられる伝承を用いているので除外して考えると、年次の伝承を含む文献の方が回数を含む文献よりも成立が古い。初めに回数のみを伝える伝承が成立して、後にそれが年次に並べられたというような推測を支持する要素はまったく見られない。かえってはじめに年次を伝える伝承があって何らかの理由でそこから年次の情報を除いて回数だけの伝承に作り変えられたとする見方が自然である。『十二遊経』の伝承は年次を示す伝承に分類できるものであり、現存する漢訳の訳出年代からすれば『僧伽羅刹所集経』について古い。現存しない異訳の存在を信じるならば最初期の伝承である可能性もある。

(1) 『僧伽羅刹所集経』の道安の「序」によれば僧伽羅刹 (*Saṅgharakṣa* 衆護) はカニシュカ王の師であったといい、アシュヴァゴーシャと同時代人であったことになる。また僧伽羅刹には他の著作として「修行道地経」があり、その最古の訳は安世高の『道地経』（大正 15 p.290 下）であるので僧伽羅刹の年代が安世高が洛陽に至る A.D.147 年よりも下ることはあり得ない。『国訳一切経・本縁部 9』の常盤大乘氏による「僧伽羅刹所集経解題」pp.263～264 参照。

(2) 森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林 1984 年 pp.486～

(3) 同書 pp.543～

(4) *Janos Szerb, Bu ston's History of Buddhism in Tibet, critically edited with a comprehensive index*, Wien, 1990, Introduction, p.XI